

●『よくわかる！行動分析による認知症ケア』

著者：野口 代・山中克夫（筑波大学人間系）

発行：中央法規出版／2019 年 8 月 30 日

価格：本体 2,200 円＋税

判型：B5 判，147 頁

ISBN：978-4-8058-5938-4



【内容紹介】

本書は、認知症のいわゆる“問題行動”である認知症の行動・心理症状（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia; BPSD）に対する行動分析に基づくアプローチについて解説したものです。

日本の認知症患者数は今後、団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年には、700 万人前後に達し、さらに増加することが見込まれています。従って、自分の身近な人が認知症になり、日常的に認知症の人に接するという経験を誰もが持つようになります。そしてその時に多くの人が戸惑ったり、悩んだりするのが本書で取り上げている BPSD です。

BPSD という言葉を聞き慣れない方も多くいると思いますが、例を挙げると有名なものでは、徘徊や物盗られ妄想などは聞いたことがあるかもしれません。他にも抑うつや不安、繰り返し大声をあげること、つまらない物を大量に収集する行動などが挙げられます。ほぼすべての認知症の人にいずれかの病期でこの BPSD が発症することがわかっており、そのため認知症の人を介護するほとんどの人は BPSD に対応しなければならないということになります。また BPSD は、介護者にとっても本人にとっても負担や影響が非常に大きく、その対応が重要な課題になっています。

BPSD に対する薬物療法のガイドラインでは、まず非薬物的アプローチを優先的にを行い、効果が得られない場合に薬物療法を行うということになっています。その非薬物的アプローチも近年では多様になってきていますが、なかでも BPSD に対しては行動分析に基づくアプローチの有効性が高いことが国際的に認められています。

本書全体を通して、行動分析の考え方により、認知症の人が BPSD を起こす理由を考えてもらい、認知症の人への共感を深めてもらえるように、イラストを多く使って、BPSD が起こる流れや、適切な対応を行う流れをイメージしやすくなるように工夫しました。BPSD ケアに困っている人や、関心のある人には是非読んでいただきたいと思っています。

【出版社の書籍紹介ページ】

<https://www.chuohoki.co.jp/products/welfare/5938/>

【著者紹介】

野口 代（のぐち だい）：筑波大学人間系助教。博士（障害科学）。介護支援専門員、介護福祉士、日本心理学会認定心理士。専門は認知症ケア、高齢者福祉。グループホーム等の介護施設にて認知症の人の介護やケアマネジメントを行い、現在は特に、**BPSD** に対する非薬物的・心理的アプローチの研究を行う。

山中克夫（やまなか かつお）：筑波大学人間系准教授。博士（学術）。公認心理師。専門は高齢医療福祉心理学。認知症を中心とした高齢医療、介護の現場で活用できる心理尺度、相談援助システム、非薬物的介入法の研究を行う。